

「位牌」の宣伝より



先日、写真のようなお位牌を作つてみました。クリスタル製でお洒落な位牌です。光の当たり具合で七色の虹色に発光するよう加工してあるのも魅力。私のカメラ、撮影技術ではそれを再現出来ないのが非常に残念です。そのお位牌には「ご先祖さまありがとうございます」とありますが、本来ならセンスの良い私が考えぬいたスペシャルな「戒名」が刻れます。本堂内お焼香台にお祀りして多くの人にお参りをしていただいておりますので、既にこの3ヶ月間で3名の女性から「御予約?」をいただきました。当方も佛具屋さんからいただいたパンフレットで対応させていただいております。花柄の透かし彫りが入ったのもあります。女性は目を丸くして、お気に入りのブティックに行ったかのように品定めをされます。「私、これにする!」とご決断されて出てくる次の言葉が、「主人(夫)とは、別々の位牌にしてくださいね!主人は普通の黒いのでいいですから」。3名の内2名からこのようなご要望を承りました。私も…「まあ、大丈夫だとは思いますが(汗)、ご主人より先に死ななければ問題ありません」とお答えしておきました。

位牌のお祀りの仕方からも「夫婦別性」の問題が垣間見られます。キリスト教は元来「個人」単位の信仰ですが、佛教・神道など日本に根づいた宗教は家族や地域単位で信仰されてきた要素が大きいです。寺方も日常に「○○家過去帳一切之精靈」や「○○家先祖代々の精靈」などご回向で毎回お称えしています。これら文言について近い将来に変化を求められことがあるでしょう。ただ物理的にも、ご先祖が一人でも欠けたら今の自分の存在はないですから、それを「柱」に複数の面から工夫して努力して変化に対応していくことが大事になるでしょう。私の知人の僧侶で、昭和・平成・令和など年号が肌に合わないのが理由で、ご回向の中で亡き人のご命日を西暦で称えている方がいますが何度も聞いても馴染めません。「何がなんでも自分の思う通り」的な行いは慎みたいものです。余談ですが、先日の国会で福島瑞穂議員の丸山新大臣に対する「選択夫婦別性」に関する質問発言にイエローカードです。

私の亡き母は私が生まれる前から小学校の教師でした。訳は聞いたことありませんが職場ではずっと旧姓を使っていたようです。当時、私がまだ小学生の頃、毎晩のように父兄のお母さんから夫婦喧嘩等の相談で電話がかかってきました。その時私が電話に出ると、「○○先生のお宅ですか?」と尋ねるのは母の旧姓で、その度に私は理由も分からず嫌な思いをしたこと覚えています。母にしてみれば職場と家庭のけじめをつけたいためだったかも知れません。当時はまだ、女性が外で働きお給料を貰うことが特別な時代でした。 俊徳丸